
バカとアイドルと後輩達との日常風景

ransu521

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとアイドルと後輩達との日常風景

【Nコード】

N8876Z

【作者名】

r a n s u 5 2 1

【あらすじ】

文月学園に、一人の女子生徒が転入してきた。その転入生は、有名なアイドル『MARNO』だった。学園内で話題となっているMARNOは、どうやらAクラスに転入したらしい。その日から、明久達の生活は相変わらぬ騒がしさをとどめつつも、少しずつ変化を見せて行くのであった。アイドルとの出会い、後輩との出会い、様々な出会いが、明久達を待ち構えていた。

プロローグ

「グスン……グスン」

「ねえ、どうして泣いているの？」

「……お母さんにもらった髪飾り、どこかに落としちゃって……」

「……それは、とっても大切な物なの？」

「うん。誕生日の日にもらった、大切な髪飾り……」

「そっ……なら、僕でよかったら、一緒に探そうか？」

「え？ いいの？」

「もちろんだよ。このくらい、当然のことだよ」

「……ありがとう」

「君、名前は？」

「わ、私は……牧野亜美」

「亜美、か……可愛い名前だね」

「か、可愛いって言われたのは初めてかな……？ 君の名前は？」

「僕？ 僕の名前は……」

プロローグ（後書き）

お久しぶりです、ransu521です。

今小説は、「バカとアイドルと日常風景」「バカとアイドルと後輩達」を再編集したものでございます。

後者に至っては未だに連載続いてますが……まあ、ね？（おい）。現在の自分で書いたらどうなるんだろう……？という興味本位から初めて見ました。

多分途中で挫折します（おいこら）。

今までのエピソードに加えて、新たなエピソードも盛り込む予定です。

どうか新しい形の「バカアイ」シリーズをよろしくお願い致します。

第一問 1（前書き）

【第一問】 現代国語

以下の問いに答えなさい。

「前に学んだことや古いことを研究して、それによって現代のことを知ることを示す四字熟語を答えなさい」

姫路瑞希の答え

「温故知新」

教師のコメント

正解です。この問題は、姫路さんには簡単過ぎたでしょうか？

土屋康太の答え

「体重測定」

教師のコメント

女性にとってはとてもシビアな問題ですが、古いことは研究出来ても、今のことを知ることはできませんよ。

吉井明久の答え

「自由研究」

教師のコメント

それは夏休みの宿題です。

第一問 1

＼Side????

長かった。

ここまで来るのは本当に長かったよ。

君がこの学校に通ってるってことを知って、私はもう我慢出来なくなっちゃったの。

早く会いたい。

待っててね、今会いに行きます……吉井明久君。

*

＼Side吉井明久

ある日のことだった。

僕らの通う学校である文月学園では、今日は特に行事とかが行われるわけでもないのに、かなり揺れていた。

その原因は……僕にはさっぱりわからなかった。

「一体何の騒ぎなの？雄二」

「何だお前、知らないのか？」

僕の悪友でもある、坂本雄二にそう尋ねる。

すると、何言っただコイツ的な目で、僕は見られた。

……そんな目で僕を見るな！！

分からないのは仕方ないことじゃないか！

「Aクラスに転入生が来るそうぞぞ」

「Aクラスに転入生？　こんな時期に？」

珍しいこともあるものだなあ……あ、でも確か工藤さんも転入生だったっけ？

けど、时期的には結構微妙な時期に来る転入生だと思う。

だって、今は二学期が始まってすぐの時だし。

……というか、自分のクラスの転入生でもないのに、どうしてそこまで騒ぐのだろうか？

「何言つてんだよ明久。その転入生というのが、あの有名なアイドル、『MARNO』だぞ？」

「……『MARNO』？」

ええつと……『MARNO』って言われても……聞いたことない名前だけど。

少なくとも、ここ十六年間生きてきて、一度も耳にした覚えのない言葉だった。

「知らないの？　今有名な人気アイドルよ？」

ポニーテールを揺らし、驚いたような表情を見せながら、島田美波さんがこつちにやってきた。

どうやら美波も、『MARNO』のことを知っているらしい。

「うん、聞いた覚えのない名前だね……」

「明久はいつもゲームしかやってないからな。知らなくて当然だな」

「失敬な！　マンガや小説だってちゃんと読んでるよ！」

雄二が憎い程の笑顔でそうやってきた。
だから僕はそうやって反論したんだ。

まったく、僕がゲームしかやらない廃人みたいな扱いして！
僕はそこまで堕ちてないってば！

「……マンガとゲームという組み合わせは、廃人の一歩手前だぞ、
明久」

「雄二、それは言わないで……」

「しかも、お姉さんが帰ってきたおかげで、それもほとんど出来な
いんじゃないか？」

何だか無性に悲しくなってきた。

僕、廃人じゃないのに……。

それと、とある事情があつて、僕の家には姉さんが帰ってきていた
りする。

……もつとも、今はこの前持つてき忘れた荷物を回収する為に、一
旦日本から出てるけど。

僕の家族は今、アメリカにいる。

僕は文月学園に通う為に日本に残ってたんだけど、ある一件から姉
さんが一緒に住むことになっちゃったんだ。

そう言えば妹もいるんだけど……沙耶は元気にしてるのかなあ。
と、そんなことを考えていたら。

「……………転入生、見てきた」

「うわっ！ いきなり後ろから声かけないでよ！」

突如として僕の背後より話しかけてきたのは、Fクラスのクラスメ
イトその3である、土屋康太、通称、寡黙なる性識者^{ムツリーニ}。

右手には、ムツリーニ愛用のカメラが握られている。

もう片方の手には、写真も握られていた。

さすがはムツリーニ……何て行動力の速さだ。

その速さはもはや尊敬に値するよ。

「どんな子だったの？」

「……………白」

ムツツリー二は、一体転入生のどの部分を見てきたのだろうか？

「……………一枚三百円」

「買った！」

「買うな！！」

「いだだだだだだ！！」

買おうとした所で、美波に右腕をへし折られそうになった。
い、痛いから！

腕はそんな方向に曲がらないから！！
だから早く僕の右腕を離して！！

「お主らは相変わらず騒がしいのう」

「ひ、秀吉？」

僕達の様子を見てそう言ってきたのは、Fクラスにおける美少女その2である、木下秀吉。

最も、生物学的分類はお……いや、秀吉は『秀吉』なんだ！
性別とかそんなのは関係ない！

「……………明久、さっきからじっと見てきて、何かついておるのか？」

「いや、そんなわけじゃないけど」

いけないいけない。

妄想……………もとい考え事に没頭してしまう所だった。

とりあえず、話題を変えよう。

「それじゃあ、みんなでその転入生を見にAクラスに行ってみようよ」

「頼むから、それだけはやめてくれ」

「え？ 何でさ？ 雄二も興味あるんじゃないの？」

全力で拒否してくる雄二に僕は尋ねる。

だってアイドルなんでしょ？

雄二も男なら気になるところじゃないのかな？

「確かに気にはなる。気にはなるが…… Aクラスだぞ？」

「うん、そうだね」

「そうね。Aクラスね」

「……お前ら、実はもう分かってるだろ」

Aクラスといえば、雄二のことが好きな霧島翔子さんがいるクラスだ。

……映画館の時のトラウマでも蘇っているのだろうか？

いや、多分雄二のトラウマはそれだけじゃ留まらないんだろうけど。

「まあ、とにかくみんなで行ってみようよ！ ほら、姫路さんも一緒に」

「わ、私もですか？」

僕の隣の席に座る姫路瑞希さんにそう尋ねる。

姫路さんは、若干考える素振りを見せた後に、

「はい。私も少しだけ興味があります」

「そっか。よしっ、早速今から見に……」

と、そんな流れで僕達が教室を出ようと思ったその時だった。

「お前ら！ さっさと席に着け！！」

「げっ、鉄……西村先生！」

「吉井。今お前、鉄人って言おうとしただろ？」

「いえいえ、滅相もございません！」

危ない危ない……危うく鉄人と言ってしまふ所だった。

たった今僕達の教室に入って来たのは、西村先生、通称、鉄人。

とある一件から、元々担任だった福原先生に代わって、僕達の担任になることとなった。

……以降、鬼の補習の様な毎日が続く羽目に。

「それじゃあ、授業を始めるぞ」

こうして、とりあえず転入生を見に行くのは次の休み時間まで流れることとなった。

*

授業も四時間目まで終わり、今は昼休みだ。

行くとしたら、このタイミングしかない。

というわけで、僕は真っ先に雄二に声をかけることにした。

「雄二、転入生を見に行こうよ」

「……どうしても見に行かなければ駄目か？」

あからさまに嫌そうな表情を浮かべる雄二。

気持ちは分からなくもないけど、今回ばかりは譲れない。

「クラスの人がほぼ全員行っちゃってるし、遠くから見ていると雄二だつてバレないよ」

辺りを見回してみれば、既に旅立っているクラスメイト達は何人もいるみたいで、教室の中は僕達を含めて数人しかいない。残っている人達も、

『もちろん見に行くよな？』

『当たり前だろ！これを機にお友達になるんだ！』

『いや！もうここまで来たら付き合うしかない！』

『きつとMARNOは俺に会いに来てくれたんだ！』

『バカ野郎！俺に決まってるだろ！！』

『でも俺は、やっぱり姫路さんが好きだ！！』

そんな会話をしながら、彼ら三人は出ていった。

……最後のセリフを言った奴、後で裏来いや！

「けどアキ、MARNOって誰かを知らないんでしょう？」

「……否定はしない。本当に知らないし」

「それじゃあ……顔を見たって分からないんじゃないですか？」

まあ、多分顔を見た所で、それが誰なのかなどまったく分からないだろう。

けど、やっぱり美少女アイドル転入生は、見たい気がする。

さっきムツツリーニから写真も買ったしね！

「……明久、顔がニヤけておるぞ」

「ハッ！？僕は一体何を……？」

「妄想でしょ？」

美波が凄くストレートに言ってきた。
うう……少し、心が折れそうだ。

「ほんじゃ、飯を食いに行く前に、ちょっとくら見てくるとするか。
アイツに見つかるのも嫌だしな。屋上でいいよな」

「うん、いいよ。その頃には人も少なくなってると思うしね」

「やっぱり今行こう、すぐに行こう」

「いきなり意見を変えてきた!？」

あまりに早すぎる方針変更だ！

……そんなに霧島さんに会うのが嫌なのか、雄二は。

折角霧島さんは雄二に好意を抱いているというのに……何て奴だ。
僕だったら迷わずその好意を受け取っているというのに。

「けど坂本。ウチ、お腹空いたんだけど」

「あ……私もです」

美波が手を挙げながらそう告げると、姫路さんも若干恥ずかしがる
素振りを見せながら、そう言った。

ああ……なんとというか、癒されるなあ。

そんな感じで僕が姫路さんのことをジッと眺めていると、

「……アキのバカ」

「え？何か言った？美波」

「な、なんでもないわよ」

美波が僕のことを睨んでいるのが分かった。

何か呟いていたような気がするけど……気のせい、だよな。

「さて、とりあえず今から見に……」

「……………昼ごはん」

「そ、そうだったな……………」

まさかムツツリーニからそんなセリフが出るとは思っていなかったのか、さすがの雄二も少し動揺しているようだった。

「まあ教室を出ないことには、話は始まらないからな。とりあえず教室を出るか」

「そうですね。今日も皆さんの為にお弁当を……………」

「す、すまないな、姫路。俺はすでに購買でパンを買ってあっただな……………」

「ワシも、今日は家から弁当を持ってきておるのだ」

「……………！！（ブンブン）」

「ああ……………瑞希のお弁当があるなら、私も家から弁当を持ってこなければ良かったなあ」

みんな姫路さんの弁当を拒否することの出来る言い訳を持っている……………となると、僕だけしかないじゃないか。

「あ、あの……………明久君は、どうでしょうか？」

「う、嬉しいなあ……………よかったら、僕が貰うよ」

「本当ですか？嬉しいです」

ああ……………この笑顔を見る為だったら、死んでもいいかもしれない。いつしか僕の体、崩壊するんじゃないかな……………。

「さあて、屋上に行くぞ」

「う、うん」

なんだかいつも以上に爽やかな笑みを浮かべて、雄二はこっちを見

てきた。

コイツ……分かっててこんな顔してやがるな。
そうして僕達は、Fクラスの扉を開けて、教室の外に出た。
その時だった。

チリン。

「……ん？」

「どうしたの？アキ」

「いや、今鈴の音が聞こえたような気がして」

確かに今、鈴の音が聞こえた気がしたんだけど……気のせいかな。
しかも、どこかで聞き覚えのある、鈴の音が。

まあ、今はとりあえず昼食の時間だよね……もうすぐ僕の処刑時間
が迫ってきているも同然なのだけれど。

「……あ」

その時。

誰かの声が、僕の耳に聞こえてきたような気がした。
だけどこの時、僕は気のせいだと思って流してしまったんだ。
これから起きる騒がしい日常の始まりを告げる鐘の音と共に。

Side???)

今のは間違いなく明久君だったよね？

だけど、私が声をかける前に明久君はお友達に囲まれて何処かに行
っちゃった。

変わってないなあ、明久君は。

小さい頃から、多分ほとんど変わってない。

「……どうしたの？」

その時、私の背後から声が届いてきた。

振り向いてみると、そこにはAクラスの代表——霧島翔子さんがいた。

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど……」

霧島さんなら知ってるかな？

そう思って私は、こう尋ねた。

「明久君のクラスって、何処？」

第一問 2

そんなわけで、僕達はとりあえず昼食を食べてから転入生である MARN O を見に行くこととなった。

出来ることならこの場から今すぐ立ち去りたいところだが、姫路さんにああ言ってしまった以上、このまま逃げ出すわけにはいかない。それに、雄二達が逃げることを許さないと目で語っている為、僕は戦略的撤退をすることが出来なかった。

「いいな……」

何やら美波が物欲しげな目で姫路さんの弁当を眺めている。

そんなに欲しければ素直に食べてみればいいじゃないか！

そして僕達が経験してきた苦しみを一緒に味わうがいい！！

「明久……顔が凄いことになっておるぞ」

秀吉にそう指摘されて、ようやっと僕はそのことを自覚する。

どうやら僕は、あまりにも現実逃避しすぎていた為に凄い表情となっていたようだ。

「だ、大丈夫ですか？」

ああ、姫路さんが優しく僕に声をかけてくれるよ。

嬉しいはずなのに……その笑顔は無垢なるもののはずなのに。

今の僕には、何故だかあの世へと送る水先案内人にしか見えないのはどうしてだろうか？

「なあ、姫路。喉渇いちまったから水買ってきてくれないか？」

ナイス雄二！

我が悪友ながら、よく言ってくれた！！

「お茶でも構いませんか？」

「ああ。これで買ってきてくれ」

ポケットから小銭を取り出して、雄二はそれを姫路さんに向かって投げる。

慌てて姫路さんはそれをキャッチして、そのまま屋上から消え去った。

……さて、後は美波だけだな。

「美波、そこには確かムッツリー二の鼻血が」

「ええ！？」

もちろんそれは嘘なのだが、何故か都合のいいことに美波の制服には謎の汚れがついていた。
本当に、奇跡って怖いね。

「急いで洗ってきた方がいいと思うよ。血はシミになりやすいつて言うからね」

「もうー！　そういうことなら最初から言ってくればよかったのに！」

泣きごとを言いながら、美波も屋上から出て行った。

……さて、後はこの弁当を処理するだけだ。

「……………ナイス明久」

「ありがとう、ムッツリー二。そして雄二、さりげないフォローを

ありがとう」

「さすがに姫路の奴を泣かせるわけにもいかなえからな……それに、島田にもこの現実を見せてはならないと思ってな」

なんだかんだ言つて、やっぱりコイツは友達想いのいい奴……。

「あ、明久が苦しむ姿を目の前で見せてやるのもよかったかもしれないな」

前言撤回。

コイツは友達を売る最低な奴だ。

「雄二……そうはいかないぞ。僕は美波達に戻ってくる前に、この弁当を処理しきつてみせる！」

「あ、明久！ 無理はいかんぞ！ 身体に毒じゃー！」

「大丈夫だよ秀吉！ 僕の胃は多分鍛えられてるから」

「それは明らかに死亡フラグ宣言じゃー！！」

秀吉も止めようとしているが、構うもんか！

美波達の前で醜態をさらすぐらいだったら、ここで全部食べ切ってしまった方が断然いい！

例え僕の身体が再起不能の状態になつたとしても、構いやしないさ！！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おー！！」

そうして、僕は姫路さんの弁当を食べたのだった。

「……………男の中の男」

最後に聞こえたのは、ムツツリー二のそんな一言だった。

「いや、単にあほなだけだろ」

黙ってろ、雄二。

*

そして、昼食後。

さつき食べた姫路さんの弁当が祟ってか、保健室に寄る羽目となっ
てしまった僕。

中に入った時の保健の先生の同情の眼差しは、今でも決して忘れな
い。

「ふ、ふう……」

「大丈夫か？ 明久」

「う、うん、何とか生きてる……と思う」

正直言つて、あの弁当を食べ切った僕は……胃がイカれてると思う。
と言つか、食べる度に体が震えていたような気がするけど……気の
せいだよな。

一瞬意識が飛んだのも、気のせいだよな」

「ど、どうしたの？ アキ。凄い顔してるわよ？」

「え？ そう？ ……ああ、これが三途の川って奴か」

「あ、明久！？ それを渡っては駄目じゃ！ こっちに帰ってくる
のじゃ！」

ああ……天使の姿をした秀吉が、僕のことを引きとめてくれてるよ

うな気がするよ。

秀吉のその姿を見れるだけで、僕は幸せだ……。
安心して天国に……理想郷アガルタに行けそう気がするよ……。

「バカは放っておいて、さつさとMARNO見に行くぞ」

「え？ ちょ……ひどいよ雄二！」

「あ、戻ってきた」

さすがに放っておかれたら、僕だって気づくって！
いくら僕でも、そこまではバカじゃないから！

「いや、バカだな」

「バカね」

「バカだのう」

「……………バカ」

「みんなひどくない？」

しかも、僕は今心の中で呟いた気がするんだけど。
何で僕の心の声が聞こえてるんだ！？

「お前の言いたいことなんて大体分かるっの」

「……………あれ、また？」

「だ、大丈夫ですよ明久君！明久君にもいいところは沢山ありますから」

「あ、ありがとう姫路さん」

手を握って、姫路さんは僕にそう言ってくれた。

ああ……なんて嬉しい一言なんだろう。

それに、この笑顔さえあれば、僕はもうどうでもよくなりそうだし……
さっきの弁当がなければ、尚この笑顔が素敵なものに感じるはず

なのに。

「それにしても、あのMARNOがウチの学校に来るなんて、一体どんな事情があるのかしら？」

「フム……それについてはワシも気になるところじゃ。今では日本を代表するアイドルである彼女が、どうしてこの文月学園に来たのか」

「学費が安いから……というわけでもないよな。アイドルなんだから、一応報酬は貰えているわけだし」

「そしたらこの学校に来たのは、勉強の為じゃろうか」

「勉強の為、か……」

やはりアイドルも勉強する必要があるんだな。

歌が旨かったり、可愛かったりするだけじゃ駄目なのかもしれない

……あれ？

なんだか、姫路さんにぴったりじゃないか？

「あ、明久君……そんなに顔をジロジロと見られると、その……照れてしまいます」

「……あ、ゴメンゴメン」

顔を赤くして、姫路さんがそう言ってきた。
慌てて視線を外すと、そこには般若がいた。

「……美波？ どうしてそんな表情を浮かべているの？」

「……なんでもないわよ、バカ」

あ、またバカって言われた。

本当に僕って、一体何なのだろう……？

「……………もしや、会いたい人がいるのかもしれない」
「会いたい人？」

ムツツリー二の言葉に僕はちよつとひっかつた。

もしそれが本当なのだとすると、『MARNO』の知り合いがこの学校にいることになるけど。

いやあ、まさかそんなことはないでしょう。

「まあもつと別な理由もあるかもしれないが……と、話をしている内にAクラスに来たが、何だかもう周りに人がいないな」
「……………だね」

さっきまでいた人ばかりが、今ではもう散らばっていた。
と言うより、すでに空っぽになつてゐるような気がする。

「あれ、雄二？」
「あ、霧島さん」

その時。

ちようど教室から出てきた霧島さんに会った。

あからさまに、雄二が嫌そうな顔をしてる。

霧島さん、こんなに美人なのに、どうして雄二は嫌がるのだろうか？
そりゃあ時々ヤバそうな感じもしなくもないけど。

「なあ翔子、転入生はここにいないのか？」

「……………雄二も、興味あるの？」

「まあ……………アイドルの転入生だしな。少しは興味あるな」
「……………」

雄二も男だしね。

さすがにそういうことにも興味あるだろうな……と思ったその時だった。

何だか、霧島さんの様子がおかしい……。

「雄二……浮気は、許さない」

「ちょっと待て。これは浮気でもなんでもないからな」

あ、霧島さんのスイッチが入ってしまったようだ。

このままだと……雄二は多分生きて帰ってこれないだろうな。

「……あの、今度の日曜日に雄二を好きなようにしていいから、良かったら転入生の子がどこに行ったのか教えてくれないかな？」

「分かった。吉井は優しい人」

「おい明久！　なんで俺を交換条件として差し出すんだよ！」

雄二に恨みがあるとかそういうものではなくて、これも霧島さんの為だ！

決していつもの恨みを晴らそうとかそういうことを考えているわけではない、絶対に！

「……その人なら、教室を出て行って、さっきFクラスに行った」

「あっちゃゝ入れ違いか……」

「……ん？　どこがおかしくないですか？」

「何が？　姫路さん」

姫路さんは、何かがおかしいと言った。

別に入れ違いなんておかしいことでもなんでもないのに、どこが変だと言っただろうか？

「さすがは明久……この程度のことも理解出来ないとは」

「……………まさしく、バカの結晶」

「あのさ、僕のことをバカって言うの、そろそろやめない？」

今日だけで僕は何回バカって言われたのだろうか？

数えてたわけじゃないけど、もうそろそろ嫌になってきた……。

「何よ、バカにバカって言って、何が悪いの？」

「……………すみません。もう何もいいません」

当たり前みたいな表情をされては、もはや僕は何も言い返すことが出来なかった。

「いいか、明久。転入生が来たのは、どのクラスだ？」

「どこって……………間違いなくここ、Aクラスだよな？」

「それで、翔子は今、どのクラスに転入生は向かったって言った？」

「Fクラス……………だね」

「おかしいと思わないのか？」

「え？ 何が？」

何処がおかしいところでもあっただろうか？

別にFクラスに行くくらい、普通に……………普通に……………。

「……………あれ？」

「ようやく気付いたのか、明久」

「さすがはアキ。ここまで気づかないとは……………」

うん、遠まわしにバカにしてるよね、これ。

みんなして……………僕のことを。

「それじゃあ、また入れ違いにならないように、今度はFクラスに行こうよ」

「だな……何だか人だかりもそっちに出来てるみたいだし」

何故Fクラスに来ているのかは知らないけど、とりあえず僕達は方向を変え、自分達の教室であるFクラスに戻る。

その前に、僕は霧島さんから気になる情報を聞くことになる。

「……あの子、吉井のことを探してた」

「え？ 僕のことを？」

どういうことだろう。

『MARNO』が探しているのは僕？

アイドルの知り合いなんて僕にはいないと思うけど……。

「……アキ、もしそれが本当なら……分かってるよね？」

「ひいっ！」

み、美波から謎のオーラが放出されてるよ！

こ、怖すぎる！

そして姫路さん、君はどうして釘バットを手にしているんだい？
目も心なしに光がこもってないよ？

「……雄二。お昼、一緒に食べよう」

そんな中、雄二を昼食に誘っている霧島さん。

「何だ、まだ食べてなかったのか。俺はさっき、明久達と食べてきたばかりなんだ。すまないな」

「……お弁当、作ってきてる。だから、一緒に食べよう？」

「いや、だから俺はもう腹いっぱい……」

「食べよう?」

「……はい」

あ、とうとう折れた。

雄二の心をここまで折らせるなんて、さすがは霧島さん……恐るべし。

「それじゃあ坂本はAクラスに置いてくとして」

「さて、島田。俺も連れてってくれ。コイツと二人きりというのは、何だか居づらいんだ」

「雄二……お昼ご飯」

「……分かった、食べるから。その左手に持っているスタンガンのスイッチを入れないでくれ」

いつの間にか霧島さんの右手には、スタンガンが握られていた。

……うん、危険だね、霧島さん。

「それでは坂本君。また後で迎えに来ますから」

「行かなくていいでしょ。どうせ時間になったら戻ってくるんだし」

あ、ようやくと元に戻ってくれたみたいだ、二人とも。

というか姫路さん。

迎えに行くという表現は……正直どうかと思うけど。

「……………早く行こう」

「ムツッリー二の言うとおりじゃな。早くしないと、昼休みが終わってしまふ」

「だね。それじゃあ、行ってみよう」

そんな僕達の姿を見て、美波が凄い形相でこっちを睨んできていた。
……すごく怒ってる、けど、何で？

僕はただ、ボケていただけなのに、どうしてここまで言われなくてはならないんだ？

ていうか今日の僕、かなり扱いひどくない？

「ち、違うよ美波！ これは偶然で……」

「偶然で、瑞希が手をアキの顔に当てるなんてことはないわよねえ？」

「ま、待って、美波！」

くっ……このままだと、僕は四の地固め（廊下で公開処刑バージョン）を喰らってしまう！

それだけは避けないと……僕の名誉にも関わる問題だから！！

「み、美波……」

「何よ？ 遺言があるというの？」

「え？ 何？ 僕……死ぬの？」

「運が悪ければね」

今回はそっちバージョンでしたか！

もしや、首の骨を折るとか、そういうパターンですか！？

や、ヤバイ……美波の目がマジだ。

このままだと、本当に僕は殺される……！！

「お……」

「お？」

「女の子は胸がなくてもいきが出来ない程に首が締まってるうっううっうっうっうっうっうっ！……」

「余計なお世話よ！ アキに胸のことをどうこう言われる筋合いはないー！」

「美波、マジで首だけはやめて息が出来ないからああああああああああああああ！！」

……何でこういう時にこんなセリフが出るんだよ。

どうなってるんだ、僕の判断力。

……ああ、また綺麗な川が見えてきたなあ。

あの向こうには、一体どんなパラダイスが待ち受けているのだろうか？と、本日二回目の三途の川を眺めていると、

チリン。

「……あ」

「そろそろ解放してやったらどうじゃ？このままじゃ本当に明久が死んでしまうぞ？」

「……そうね。今日はこのくらいで勘弁したげる」

そう言つて、美波が僕の首を解放してくれた。

……今、また鈴の音が聞こえたような気がしたんだけど。

「どうかしましたか？ 明久君」

「……うん、鈴の音が、聞こえたんだ」

「鈴？」

「………そう言えば、転入生も鈴の髪飾りをつけてた」

なるほど……転入生も鈴の髪飾りをつけているのか。

つまり、さっき教室を出る前に聞こえたのも、その鈴が鳴ったからか……。

「ということは、近くに転入生……が？」
「……」

僕の言葉が最後まで言い終える前に、僕達の目の前に、女の子が歩み寄ってきた。

……黒くて、後ろの方がお団子みたいになっている髪型。
背は、僕と同じか少し小さいくらい。

……お団子みたいになっている所には、鈴の形をした髪飾りがあった。

……多分あの鈴から音を発しているんだと、僕は思った。

そして次の瞬間、そんな女の子から、こんな驚きの言葉が出てきたのだった。

「……明久君、だよね？」

「「「「「え？」「」「」「」

今、この子は僕の名前を言ったのか？

いやいや、まさかそんなことはないだろう。

僕にこんな可愛いアイドルの知り合いはいないはず……。

でも、霧島さんの話だと僕を探してたって言う話だし。

それに、少し余計なことだけど、どうしてさっきから僕の背後から殺気が感じられるのだろうか？

「……落ち着くのじゃ、二人とも。今のはきつと聞き間違いじゃ。だからどこから持ってきたのか知らぬが、江戸時代の拷問用具を手際よく用意するでない」

後ろから秀吉の声が聞こえる。

というか二人とも、そんなことしてたの！？

え、何？

僕を殺す気！？

「……えっと、君が転入生の」

「『MARN O』……牧野亜美だよ……覚えてない？」

やっぱりこの子が、転入生としてAクラスに転入してきた子か。

……にしても、牧野亜美？

何処かで聞いたことあるような名前なんだけど……何処で聞いたんだろう？

思い出せそうで、思い出せない。

聞き覚えはあるのに……。

「お知り合い……ですか？」

「まさか……人違いでしょ。もし本当に知り合いだったら……殺すわ」

「何で!？」

僕の命というのは、そこまで理不尽な理由で失われてしまうほど儚い命だということなのか!？

ていうか、何故に僕はそんな理由で殺されなければならないの!？

「えっと……ごめん、思い出せないや、牧野さん」

「そっか……忘れちゃったんだね、あの約束も」

「約束?……!?!」

ゾクッ!!

二人からだけじゃない。

周りにいる男子からも、謎の殺気を感じる。

や、ヤバイ……このままではこの場にいる全員を敵に回しかねない!

唯一僕の味方になってくれそうな秀吉がいたとしても、この状況を収めることは出来ないだろう。

「話が長くなるようなら……屋上で話してみればどうじゃ？」

「ナイスアイデア秀吉！それでこそ僕の嫁！！」

「ワシの場合は婿じゃろ！！」

「ですから……どっちも違うと思います」

赤くなつて抗議する秀吉と、ノリノリの状態である僕に、困り果てた表情を見せながら、姫路さんがそう告げた。

「ま、何だかややこしくなりそうだし、屋上行って、真相を確かめるのもいいんじゃないか？」

「それもそうだね……って、雄二。いつの間に帰って来たの？」

ふと横を見ると、何故か汗まみれの雄二の姿があった。

……何があったんだ、一体。

「翔子のやつ、弁当の中に何かよく分からない薬を混ぜてたんだ……目が覚めたら、目の前には顔を赤くした翔子がいて、『責任……とって』って言うてきたんだ。俺はあの後、Aクラスの教室で何をしたんだ！？」

「……いい具合に壊れてるね、雄二」

雄二が、何故か自分の両手をゆっくりと首に近づけている。

もしかして……自分で自分の首を締める気なのかな？

……うん、このままだと自分の世界にのめり込んだまま、人生を終えてしまいそうだね。

本当ならもう少し見たいところだけど、流石に牧野さんを待たせているところだし、そろそろ引き戻すか。

「目を覚ませ……雄二！」
「アガッ！」

斜め45度からのチョップ。

これをすれば、大抵の人は元の世界に帰ってくる。

最近雄二をコッチの世界に引き戻す際に発明したことだ。

「はっ！ 俺は何を……」

「自分の手で首を締めようとしていたところまでいったわよ？」

「俺、知らない内にそんなことしてたのか？」

無自覚のため、そんなことを呟いている雄二。

いつか雄二は、発作にも似たこの症状を引き起こして死んでしまうのではないだろうか？

「……………早くしないと、昼休みが終わる」

「おっと！もうそこまで時間が迫ってたのか……早くしないと授業も始まっちゃうし、話をするためにも屋上に行こうよ」

僕のその提案に対して、反対する人はいなかった。

なので僕達は、少し急ぎ足の状態で、屋上へと向かった。

第二問 1（前書き）

【第二問】 日本史

以下の問いに答えなさい。

「紫式部が著者である、光源氏やその息子の薫の君を主人公とした平安時代の長編小説を答えなさい」

姫路瑞希の答え

「源氏物語」

教師のコメント

正解です。他にも、『紫式部日記』などを紫式部は書いていますね。合わせて覚えてしまいましょう

吉井明久の答え

「Tales of Genji」

教師のコメント

格好いいですが、何かのゲームを連想させるような英語でこまかしても無駄です。

島田美波の答え

「ガラスの十代」

教師のコメント

それは光GENJIです。というか、どこからその知識を得たのですか？

第二問 1

「……で、ということなのよ、アキ？」

「それは僕に聞かれても……一体何が何やらよくわからないし」

僕達は今、屋上に来ている。

そして、何故か僕を取り囲むように、雄二・秀吉・美波・姫路さん・ムツリーニは並んでいた。

端っこの方には、須川君達は何やら準備をしている。

……僕、これからどうなるんだろう？

「あの……明久君とはどこで会ったのですか？」

姫路さんが牧野さんに尋ねる。

すると、牧野さんは、

「道端だよ。私が泣いてる所に、偶然ながら明久君が通りかかってくれたんだ」

道端で泣いていた？

……あれ、何だか少しずつ思い出してきたような気もするぞ。

「どうして泣いてたりしたんだ？ それに……それはいつの話だ？」

次から次へと、雄二は質問を繰り返す。

雄二め……牧野さんを困らせてそんなに楽しいか。

けど、当の本人である牧野さんは、ちっとも困ったような雰囲気を見せていない。

どころか、その質問が来ることが分かっていたかのように、答えた。

「小学校の時、この鈴の髪飾りを何処かに落としちゃった時があったて、途方に暮れて道端で泣いてたら、明久君と一緒に探してくれるって言ってくれたんだよ」

小学校の時……鈴の髪飾り……道端……。

僕の頭の中で、それらの言葉が反響する。

その言葉を組み合わせて思い出される記憶は……。

……ああ！

「思い出した！ あの時、お母さんからもらった大事な髪飾りを探していた『亜美』か！ まさか牧野さんが『亜美』だったなんて……」

「ようやつと思い出してくれたんだね？ 明久君……」

すると、牧野さんは突然目から涙をこぼしていた。

「え、ええ？ どうしたの？ 牧野さん……って、うわっ！」

ドンッ！

一瞬そんな衝突音が聞こえたかと思うと、次の瞬間には、牧野さんが僕に抱きついてきていた。

……って、牧野さん！？

その格好はヤバいつて！

その……ぼ、僕の体に当たる、謎の柔らかい感触、が……。

「……………羨ましい」

ムツッリーニ、君はこの状況でもそんなこと言ってるんだね。

あ、鼻血を出してムツツリー二が倒れた！？
救急車！ 誰か救急車を！

「……………感無量」

「ムツツリー二！？ 駄目じゃ！ 今倒れちゃいかんぞ！」

もはやもう何もかもをやりきった表情を浮かべているムツツリー二。
…………何だろう、状況がさらに混沌としてきたような気がする。

「ま、牧野さん…………」

「…………亜美って呼んで、明久君」

「う、うん…………ま、じゃなかった…………亜美」

「…………嬉しい、明久君。完全に忘れてなくて、よかった…………」

感動の再会。

…………うん、僕はこの時、ものすごく幸せだなあって思っていた。
なんて言っただって、アイドルに抱きつかれて、しかもそのアイドル
が僕と面識があったのだ。

このことを幸せだと思わないで、いつ幸せを感じる？

…………けど、その幸せも、

「…………アキ？」

「…………明久君？」

「…………え？」

わずか3秒で崩れ去ることとなったのだった。

「さっきウチが言ったこと…………覚えてるわよね？」

「え、えっと…………何でしょう？ 記憶にございません、が…………」

危険を察知した僕は、とりあえず亜美を一旦どかして、安全な場所に行かせる。

その時亜美が残念そうな表情を見せていたのはなぜだろうか？

「もし『MARNÓ』と知り合いだったら……殺すって言ったわよね？」

「そ、そうでしたっけ？　僕の記憶にはそんなこと言われたことなんて残されていないのですが……」

「それで……明久君は、牧野さんに抱きつかれて、そんなに嬉しそうに笑っているのは何故ですか？」

「それは単純に再会を嬉しく思っているだけで関節が妙な方向に曲がつて悲鳴をあげているうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづう！」

僕の腕の関節を掴んで、一気に美波が曲げてきた！
痛い痛い痛い！

関節はそんな方向には曲がらないよ、美波！

さり気なく人類の限界に挑戦中だよ、僕の体……！！

「……相変わらず明久は、明久だのう」

「だな」

「……………」
（コクリ）
「……………」

「納得しないで助けてよ、三人ともお
おおおおおおお！！」

この野郎、三人共他人事だからって明らかに無視しやがつて！
秀吉は可愛いから許すけど、ムツツリー二と雄二は……許さん！！

「ところでよ、明久。牧野とはどこで出会ったのかとかの話を聞かせてくれないか？」

「え？　べ、別にいいけど……その前に美波達を何とかしてええええええええええええ！！」

「……島田・姫路。制裁は後にして、今はとりあえず明久の話を聞
いよう」

雄二が二人にそう言う。

すると二人とも、渋々ながら僕の体を離してくれた。

「後で覚悟しておきなさいよ……アキ？」

どうやら制裁は、あれだけでは済まないようだ。僕、今日死んじゃうのかな？

「んで、明久。話を聞かせてもらえないか？」

僕は、雄二に言われて、みんなに向かつて話し始めた。僕と亜美との、昔にあった話を。

*

数年前。

僕達がまだ小学生だった頃の話だ。

日曜日という休日。

僕は、一人で街に繰り出したのだった。

理由は特になかったけど、強いて言うなら、退屈だったからだ。別に僕の両親が死んでいなくてしまったわけでもないし、姉弟がいらないわけでもない。

この日は偶然、両親は親戚の家に出掛けてしまって、家を留守にし

ていた。

沙耶も両親について行き、そして姉さんは、勉強中。

……たまにコッチに顔を出して捕まるのもなんか嫌だった。

だから僕は、書き置きをしておいて、コッソリと家を出たのであった。

「……ふう。これで危険は回避出来た」

捕まったら最後。

僕はひよつとしたら、生きて帰ってることが出来ないかもしれない……無論、精神面で。

「やっぱり、見に行くとしたらゲームショップかな。いや、本屋に行つて漫画を見るのもいいかもな」

と、街を歩きながら、今日の計画をたてていた。
その時だった。

「……グスン、グスン」

道端で、一人で泣いている女の子を見つけた。

周りに人はいない……お母さんとはぐれちゃったとかかな？

年は多分僕と同じくらいだと思う。

白いワンピースを着た、小さな女の子がそこにいた。

「……どうしたの？ どうして、泣いているの？」

思わず僕は声をかけていた。

すると女の子は、涙を流した顔のままで、こっちを向いてきた。
そして、僕にこう言ったのだ。

「お母さんからもらった大切な髪飾り……何処かに落としちゃって」
成る程、状況は掴めた。

するとこの子は、お母さんからのプレゼントを大切に持っていたけど、ふとした瞬間に何処かに落としてしまったということか。

……言い直しているだけじゃないかって？
気にしないで欲しい。

「もしよければ……僕と一緒に探してあげるよ」
「……え？」

思わぬ言葉だったらしい。

女の子は、驚いたように目を見開き、そして不安そうな表情をして、

「……本当に、いいの？」

と、聞いてきた。

僕は、曇りのない顔をして（僕の後付け設定だが）答えた。

「いいっていいって。このくらいどうってことないさ」

僕がそう言つと、女の子の表情が和らぎ、ちょっとだけ笑顔になる。

……いつの間にか涙も止まっている様子であった。

「……ありがとう」

「どう致しまして。ところで君、名前は？」

いきなりそんなことを聞くのは少し失礼だと思ったけれど、僕はそう尋ねてみた。

すると、女の子は少し戸惑いながらも、

「……牧野亜美」

と、答えてくれた。

その名前を聞いた僕は、素直にこう言った。

「亜美、か……可愛い名前だね」

「か、可愛いって言われたのは初めてかな……？」

顔を赤くして、亜美が呟くように言う。

どうして顔を赤くしてるのかな？

僕がそう疑問を抱いている中で、

「君の名前は？」

気付けば亜美がそう尋ねてきていた。

そうだね。

答えてくれたからには、僕の方も自分の名前を言わなければならない。

だから僕は、

「僕？ 僕の名前は吉井明久。よろしくね」

そう言って、僕は右手を差し出す。

亜美は、その手を躊躇いながらも握ってくれた。

こうして僕達は、一緒に髪飾りを探すこととなったのだ。

「それで、どの辺りに落としたかは分かるの？」

「……それが、何処に落としちゃったのか分からなくて」

うん、困ったなあ。

何処で落としたのか分からないんじゃないか、探しようがないじゃないか。

「困ったな……とりあえず、どという髪飾りなの？」

形を聞かないことには、探しようがない。

そんなわけで、僕はその髪飾りの形を尋ねたのだ。

亜美は答える。

「鈴の、髪飾り……」

さつきも言った通り、涙は流していない。

けれど、少しだけ笑顔だったのが、不安そうな顔になっていた。

「鈴の髪飾りか……よし。君の家は何処？」

「え？」

今度はキョトンとされた。

……まあ、無理もないよね。

髪飾りとは関係のない質問のようにも聞こえるし……実際に関係はあまりないんだけど。

「……コッチの方だけど……そっか！ 来た道を戻れば、何処かに落ちてるかもしれないもんね！」

「へ？……あ、うん、その通りだよ」

今でも思う。

僕はとてつもなくバカな男だ……自分に言うのもなんだか嫌だけど。

というより、どうして僕は何も思いつかなかったのにあんなことを聞いたんだ？

「それじゃあ、行こっか？」

「……うん！」

そう答えた亜美の顔は、さっきと違って笑顔だった。

そうして僕達は亜美が来た道を辿って行ったわけだけど……。

「……ないね、髪飾り」

「……うん」

至る所を探し回った。

塀の上、溝の中、草の中……けれど、それらの中から、髪飾りが出てくることはなかった。

「……家に置いてあるとかは？」

「それはない……家の中にいるときは、いつも髪飾りしてるもん」

「じゃあ、今だけは髪飾りを外していたってこと？」

「……今日は習い事があったから、鈴を鳴らさないようにって外してたんだ」

「習い事って？」

「ピアノだよ。大好きだったから、お母さんをお願いして、ピアノ教室に通わせてもらってるんだ」

成る程……確かに演奏中に鈴の髪飾りをつけていて、その鈴が鳴っちゃったなら、ちよつと邪魔だよな。

ピアノの音に書き消されて他の人達には聞こえないかもしれないけど、何より自分の耳に届いてしまうのが一番の欠点とも言えるだろ

う。

「それでポケットの中に入れてたら、何処かに落としちゃって……」
「で、今に至ると……」
「……うん」

再び泣きそうな顔になる亜美。

困ったなあ……見つけてあげたいけど、時間だけが過ぎていく。
特徴も分かってて、こうして亜美の家までの道のりを歩いてみても、
見つからなかった。

「そうだ！ そのピアノ教室まで行ってみれば……」
「それはさっき探したよ……結局見つからなかった」
「……」

もう他に手はないのだろうか。

このまま、亜美の大切な髪飾りが見つからないまま、終わってしま
うのだろうか？

「……お母さんにもらった大切な髪飾りなのに。なのに、私は落と
しちゃったりして……」
「亜美……」

亜美の涙を止める方法は、僕にはなかった。
そして、僕達が途方に暮れていた時だった。

「うわっ！」
「キャッ！」

突然強い風が吹いた。

思わず僕と亜美は、目を閉じてしまったくらいだ。
そして、僕達は聞いた。

チリン。

「……今のは、鈴の音？」

「多分、そうだと思う……いや、そうだよ！」

はつきりと僕の耳にも聞こえた、鈴の音。

それは、周りの音なんか気にせずに、音を発していた。

まるで僕達を誘い込むように……自らの居場所を伝えるように。

「……けど、何処に」

肝心の場所が、分からない。

音だけでは、どうしようもなかったのだ。

せめて、もう一回鳴ってくれるとか、ないかな……そう思っていた
時だった。

ピカッ。

今度は光が反射したようなものを感じた。

……慌てて辺りを見回す……あつた！

「あの木の上だ、亜美——！」

第二問 2

「……………あつ！」

そして僕達はようやくと見つけた。

鈴の髪飾りは……………木の上に引っ掛かっていたのだ。

「けれど、どうしてあんなところに……………」

「……………カラスが、持って行っちゃってたのかな？」

「……………カラス？」

亜美の口から発せられたのは、聞き慣れた単語でありながら、この場において意味を成すのかどうか判別出来ないものだった。

鈴の髪飾りとカラスに、どういう関連性が……………まさか。

「そのカラスが、鈴の髪飾りを偉く気に入っていて、自分につけようとした……………」

「……………それは違うよ、明久君」

あれ、若干僕のことを生暖かい目で見てない？
まさか亜美に限ってそんなことはないよね……………。

「カラスって言うのは、光るものが好みなんだって。だから、そういうものを見ると、自分の巣に持って帰ってしまう傾向があるんだって」

「へえ……………詳しいんだね」

「お父さんが教えてくれたんだ。お父さんは何でも知ってるんだよ！」

笑顔で僕にそう言った亜美。
…… 本当に、楽しそうだな。

「けど、あんな上に引つ掛かってるんじゃないよ……
どうしよう」

そうして、僕達はもう一度木を見る。

…… 太い幹の木の上には、生い茂った葉がたくさんついているのが見える。

その木の上の方に…… 鈴の髪飾りがあった。

「僕に任せてよ……」

「え？…… 危ないよ？」

「大丈夫だよ、このくらいなら。それに、亜美の大切な髪飾りなんでしょ？」

「…… うん」

…… よし、少し痛いかもしれないけど、この方法でいこう。
僕は少し後ろに下がり、

「うらぁー！」

勢いよく木に体当たりした。

「いった……」

うん、落ちるわけじゃないよね。

これだけ太い幹の木なんだもの。

小学生の僕が体当たりしたところでびくともしないのは当然のことじゃないか。

「……明久君、せめて木を登るとかの考えは思い浮かばなかったの？」

「……あ」

そうか、その手があったか。

この木なら、登るのは割りと簡単そうだしな……どうして最初から考えなかったんだろう？

「……明久君ってさ、普段みんなから『バカ』とか言われてない？」

「え？亜美ってエスパーだったの！？」

「……やっぱり」

呆れたような表情を見せる亜美。

……あれ、セリフの選択を間違えた？

「と、とにかく、今度は登って取りに行くよ」

「……うん、けど、気を付けてね？」

心配そうな表情をして、僕にそう言ってくる亜美。

……ここは男として、キチンと言っておくべきところだろう。
ここで僕が言うべきセリフ、それは……。

「任せてよ、亜美！僕の想いを木にぶつけるように登ってみせるよ！」

「……え？」

「……あれ？」

何だろう。

僕は今、猛烈に言葉の選択を間違えた気がする。

気にしてると、何だか心が折れてしまいそうだ……だから、そんな考えを払拭するかのよう、僕は素早い動きで木を登った。程なくして、僕は鈴がある位置まで辿り着くことが出来た。……僕にかければこのくらい、大したことがない…… ようにも見えるけど。

「明久君、気を付けてね……」

「大丈夫だって。このくらいなら…… よっと」

よしっ、何とか髪飾りを取り返すことは出来た。後はこれを持って下まで降りれば…… って、

「おわっ！？」

「！？」

あ、危ない…… 危うく落ちちゃうところだったよ。

「…… ふんぬ！」

「だ、大丈夫……？」

「うん、この程度なら…… よっと」

腕に力を込めて、懸垂をするように体を元の位置まで戻す。

「ふう…… 危なかった」

「よ、良かった……」

傍目では、ほうつと溜め息をつく亜美の姿があった。

…… 流石に今回はヤバかった。

もう少し判断が遅かったら、落ちていたかもしれない……。そのまま鈴を右手で持ち、スルスルと木を降りて、

「……はい、これ」
「……ありがとう」

そつと、亜美の手に髪飾りを置く。
すると、チリンと音を鳴らして、手のひらの上に置かれた。

「これで解決。良かったね……亜美」
「うん……けど、どうして？」
「え？」
「どうして……見ず知らずの私の悩みを、聞いてくれたの？」

亜美は、不思議そうな表情を浮かべて、僕の方を見る。
……ふむ、どうしてなのかは僕にもよく分からない。
けど、亜美が困ってる所を見たら、泣いている所を見たら……。

「何となく、助けたくなったただだよ。亜美が困ってる所を見たらね」
「……たったそれだけの理由で、私のことを助けてくれたの？」
「うん、そうだけど」

すると、今度は意外そうな表情をされた。
……そんなに变だったかな、今の僕の返事は。

「なんというか……明久君らしいね」
「え？そうかな？」
「うん……どこまでもお人好しと言っか……」

最後の方に何を言っていたのかよく分からなかったが、僕は敢えて聞かないことにした。

なんとなく、聞かない方がいいと思ったからだ。

「……ねえ明久君。一つ、約束をしようよ」

「約束？」

「うん……とっても大切な、約束」

顔を赤くして、亜美はそう言ってくる。

……今思えば、この約束こそが、今後の僕の生活を大変なものにしてしまったのかもしれない。

「大きくなって……もしももう一回会うことが出来たら……その時は……私と……結婚して！」

「え！？……うん、いいよ！」

亜美が笑顔で言ったものだから、僕も笑顔でそう答えた。

……そう、これこそが僕と亜美が交わした約束。

そして、今後の大騒動を、引き起こす引き金となった言葉。

この年になって思う……どうしてあの時の僕は、何も考えずにあんな言葉を言ってしまったのだろうか？

*

「……ハッ！」

話終えた後で、僕は普段よりも数倍は早い動きで体を動かしていた。見ると、先程まで僕がいた場所には、大量のカッターナイフが突き刺さっている。

……おかしい、ここは屋上だぞ？
一体、どこから……な、何！？

「……異端者には死を！！」「……」
「……、須川君達！？」

さっきまでの須川君達は、この為に準備をしていたと言うのか！？
……目元が怪しく光っていて、正直怖い。

「こ、これはどういうことだ！？」

「みんな！やっぱり吉井明久を死刑にするべきだとは思わないか！？」

「……当たり前だ！！！！」「……」

「モテる男は憎くないか！！」

「……憎いに決まってる！！！！」「……」

「……というわけで、覚悟は出来ているか？」

「ちよつと待つて！僕にも弁護させてよ！！」

ま、まずい。

このままだと、僕の命は確実に取られる。

東京湾に沈される——！！

「……仕方がない。五秒だけ時間をやる。カッターナイフで刺されて死ぬか、ガソリンでこんがり焼かれるか、ここから特別なバンジージャンプをやるか、選べ」

「どれも全部死に直結するよ！！」

コイツらの目はマジだ。

早くどうにかしないと、本当に僕は殺されてしまう。

こんな時はどうすれば……そうだ！！

優しい姫路さんなら、どうにかしてくれるかもしれない！！
そんな期待の眼差しで、僕は姫路さんを見たけれど、

「そんな……明久君が、そんな約束をしてたなんて」
「なんかデジャブを感じるんだけど!？」

駄目だ。

美波との一件の時と同じような反応を繰り返してる。

……次は、美波……は気にしないでおう。

決して、振り向こうとしたところで殺気を感じたから頼るのをやめたわけじゃない、うん。

「くっ……ならば雄二!!」

雄二なら、何かをしてくれそうな気がする!
そう思って目を合わせようとしたら……。

「……全員、まとめて明久を殺れ!!」

目も合わせずに、みんなに命令を出していた。
死んじゃえばいいのに。

「こうなったら秀吉……ってあれ、いない!？」

「……そうくると思って、さっき教室に帰しといた」

くっ、ムツッリーニめ。

親友を裏切るというのか!？

「……裏切り者には、死を」

「……僕の命も、ここまでなのか」

策は尽きた。

もはや僕に出来ることは何もない。

……悔しいけれど、僕の人生は、ここで終わりを迎えてしまうのか。
屋上から出ようにも、入り口は須川君達に完璧に確保されている。
柵から降りることは不可能。

……周りに味方は、いない。

……さよなら、僕の人生。

「ま、待つて!!」

「「「「!?!? MARNOちゃん!?!?!」」」」

その時、僕の前に立った一人の少女がいた。

……こんな奴らに勇敢にも立ち向かったのは、亜美だ。

「あ、亜美?」

「やめてよ、みんな。明久君が困ってるじゃない!」

どうやら亜美は僕の味方でいてくれるようだ。

よかった……少なくとも僕の命は救われた……。

「明久君は……私のお嬢さんになるんだから傷つけちゃダメなの!
!」

爆弾を落としただけだった。

「吉井! 殺す!」

「ちょ……みんな、落ち着いてってば!!」

暴徒と化したクラスメイトから逃げる為に、僕は何とか策を練る。

……けど、どう考えても状況は悪くなっていくだけだ。

……ああ、僕はこのまま死ぬのか。

短い人生だったな……。

結局、この騒動は、鉄人が屋上に来るまで続いていたのだった。

第三問 1（前書き）

【第三問】 生物

以下の問いに答えなさい。

「体の構造等の情報が記録されているDNAと呼ばれる物質は、細胞のどの器官に含まれているかを答えなさい。

また、DNAはどのような構造をしているのかも答えなさい」

姫路瑞希の答え

「含まれている器官……核

構造……二重らせん構造」

教師のコメント

正解です。簡単な問題ながら、意外にもDNA自身がどのような構造をしているのかを間違えてしまうことも少なくはないので、今後とも気をつけてください。

吉井明久の答え

「含まれている器官……トーマス」

教師のコメント

『機関』ではありません。『器官』です。

坂本雄二の答え

「構造……ねじれ国会のようにねじれている構造」

教師のコメント

言葉で誤魔化した所で、間違いは間違いです。

第三問 1

「ふう……酷い目に遭ったなあ」

学校から家に帰ってきて、僕は何となく公園に行きたくなった為に外に出ていた。

家の中でゲームをしていてもよかったんだけど、なんだか少し乗り気でもなかったから……美波にあんたと言われた後だし。

「とりあえず、あそこのベンチに座ってようかな……」

僕は、公園に設置されているベンチに腰を下ろす。

そして、僕らしくもなく空を見上げた。

……夕日が僕の目に容赦なく突き刺さる。

……やめよう、なんだか目が痛くなってきたし。

「けど、まさか亜美が文月学園に転入してきたのにはびっくりしたな……」

不本意ながら、あんな約束を結んでしまっていたし。

ああ……今でも怒った美波の表情が目には浮かぶ。

姫路さんはショックを受けていたし、クラスみんなは……。

「……考えるのはやめよう。何だか恐怖しか感じないし」

うん、それがいい。

2・Fのことを考えると、何だか明日学校に行く気をなくしてしまいそうだ。

けれど、サボってしまうと鉄人からの愛の（地獄の）鉄拳制裁が待

っている。

命の危険を感じたからなんて理由は、鉄人には通用しないだろう。

「……しかし、これから大変な毎日が待ち受けているんだろうなあ」

まずは、亜美との約束はなかったことにしよう。

あんな小さな頃の約束を今でも覚えていた亜美は、正直言って凄いと思うけど。

僕は、亜美一人を選ぶことなんて出来ないのだから……姫路さんや美波もいるというのに、亜美一人だけを選ぶなんてこと、僕には出来ないよ。

それに……悔しいけど、僕は相応しい人間だとは思っていないしね。もつと頭がよくて、顔もよくて、性格もよくて……。

「僕と、正反対の人なんだと思う」

彼女達に合っているだろう理想像に、僕は何一つ当てはまってはいない。

そういった意味でも、僕は亜美とのこの約束を、結んだままでいるのはよくないのだ。

……もつとも、三人共僕なんかに好意を寄せているとは少し考え難いけど。

「そうと決まれば、僕が明日学校に行つてやるべきことを考えなくちゃね」

雄二程ではないが、僕だつて一応は考える頭は持っている……つもりだ。

少し不安が残るが、そこは仕方ないでしょう。

何をするにも、不安は付き物だし。

それにしても……。

「最近の僕は、美波を怒らせてばかりだなあ」

何でかは分からないけど、無自覚の内に僕は美波を怒らせていることが多い。

もう少し発言は考えた方がいいのだろうか……これでも、ない頭をフルに使って考えているつもり何だけどな……。と、一人悩みに悩んでいる時だった。

「あ！バカなお兄ちゃんです！」

「……ん？」

聞き覚えのある、小さな女の子のような声。

この声は、確か……。

「こんな公園に来て、一人で何してるんですか？」

「やっぱり……葉月ちゃんだね」

美波の妹である、島田葉月ちゃんが、僕の目の前に来ていた。

「どうしたの葉月ちゃん？こんな所に来て」

「お兄ちゃんこそどうして公園のベンチで夕日を眺めてたりしてたんですか？」

暇だからと言えば、信じてもらえるだろうか？

「暇だから？」

「多分暇な様子ではなかったと思います」

やっぱり駄目か……。

それなら、次なる手を使おう。

「Why don't you do your best!」

「ああ、取り乱しましたね」

何故バレた!?

完璧なる証拠隠滅だったはずだ。

……さすがは美波の妹、恐るべし。

「ところでバカなお兄ちゃん。ひとつ気になることがあったんですけど」

「ん? 気になること?」

葉月ちゃんの言う気になることって何だろう?
気になって僕は話を聞いてみると、

「今日お姉ちゃんが家に帰ってきた時、何やらものすごく怒っているような感じだったんですけど……何か心当たりとかありませんか?」

心当たりは大あります。

「さ、さあ……僕は何も知らないけど」

「そうですね? 家に帰ってきた時に、『アキめ……明日学校に来た時、詳しく話を聞き出すんだから(怒)』とか言っていましたけど」
「激しく心当たりがあります」

さすがにそこまで言われてしまうと、僕としても隠し通せる自信がない。

というか、もとより隠す理由もない。

そんなわけで、僕は葉月ちゃんに理由を話してみる。
あまり意味はないかなとか思いながら。

「そうだったんですか……あの『MARNO』が転入してきたんですか」

「うん。そんなわけで僕の周りはさらに力オスになるばかりで……」

最も、そんな話をしたところで無駄だと思うけど。

「それで、バカなお兄ちゃんはその子と『結婚』の約束を結んでしまった、と……」

「……まあ、そんな所」

「お兄ちゃん、それじゃあ私との約束は遊びだったんですか？」

「い、いやそうじゃないよ！」

小学生の女の子が、なんて言葉を覚えてるんだ！

最近の小学生は、本当に進んでいるのか！？

「……なんて、『冗談です』

「へ？冗談？」

「だって、バカなお兄ちゃんは、将来私のお婿さんになるんですから」

「……それは、まあ」

もし本当にそんなことがあったとしたら。

美波は間違いなく僕のことをブチ殺しに来ると思う。

「それじゃあ、お姉ちゃんとの誤解を解かないといけないわけですね？」

「結果的にはそうなるかな……あ、このことは美波には言わないでくれる？明日、僕の口からちゃんと言いたいから」
「分かりました。そこまでおっしゃるのでしたら、私はお姉ちゃんには何もいいません」

よかった……葉月ちゃんが物分かりのいい子で、本当によかった。

「それじゃあ、私はこの辺で失礼しますね。そろそろ帰らないとお姉ちゃんも心配しちゃうかもしれないですから」

「あ、うん。またね、葉月ちゃん」

「はい！バカなお兄ちゃん！」

最高級の笑顔を僕に見せ、それから元気に走り去って行った。

「……それにしても、僕はどう謝ればいいんだろう？」

早速僕は、そのことについて悩む必要があった。

……どう謝れば、美波に、そして姫路さんにどう謝ればいいんだろうか？

そして何より、亜美にどう話を持ちかければいいのだろうか？

「こんな時、雄二に頼るのが一番いいだろうか？」

……悪友の顔が、一瞬思い浮かばれる。

……いや、これは僕の問題だ。

僕自身の力で、僕が解決するべき問題なんだ。
だから、誰の手も借りない。

自分の力で何とかしてみせる。

「……とりあえず、まずは家に帰ろう」

辺りが暗くなってしまう前に、僕は家に帰ることにした。
その道中でも、これからどうするべきなのかを考えていた。

第三問 2

次の日。

ついに一日が経過してしまった。

僕は今、教室の前で一人立っているわけなのだが、中に入る程の勇気を持ち合わせていなかったりする。

何故なら。

「結局、何もいい言葉が思い浮かばなかった……」

一日悩んだ結果、結局いい案は思い浮かばず仕舞い。

夜遅くまで考えこんでたせい、今日は少し寝坊してしまい、弁当を作る余裕どころか、朝食すら食べてきていない始末。

ああ……せめて塩と水くらいとってくればよかったかな……。

「中からは強烈な殺気が漂ってくるし……」

隠す気のない殺気が、僕の体にまとわりつく。

きつと、須川君を代表とするFクラス男子生徒全員のものだろう（雄二は除く）。

それにプラスされるかのように、

「アキ……早く入って来なさいよ……!!」

「……」

美波の怒りのこもった声が、僕の耳に入ってくる。

……マズイ、これは絶体絶命の大ピンチだ。

このままだと、僕の命は天に召されてしまう——!!

「……やっぱり、今日は学校、サボろうかな？」

駄目だ。

こんな教室に入ってしまったが最後。

僕は生きてこの文月学園から出られなくなってしまっただろう。

そうなる、僕は……僕は……！！

「うん、脱走の準備は出来た」

覚悟は決めた。

走る準備もした。

後は下駄箱に向かって走り去って行くだけだ。

大丈夫……今の僕なら、行ける！！

I can fly！！

『そうだよ。早く逃げないとお前の命はなくなるぜ？とつと逃げ
ちまうのが得策だぜ？』

出た！

ちよつと遅かった気がするけど僕の中の悪魔！

けど、今回ばかりはその策、もらった！

「……みんな、また明日！」

とりあえず、聞こえてはいないだろうけど、僕はFクラスのみんな
にそう挨拶の言葉だけは残しておく。

じゃあね、みんな。

また明日——！！

ガシッ

↑誰かが僕の襟を掴む音

ズッ ↑そのまま地面に引きずり下ろす音
ドシヤッ ↑僕が地面に叩きつけられた音

「なっ……誰だ!？」

頭を打った為に、少し視界がチカチカする。

時間が少し経ったところで、僕はその人物を確認することに成功した。

「……み、美波？」

「アキ……おはよう♪」

鬼のような笑顔を浮かべている、美波の姿があった。

その横では、姫路さんも立っていた……謎の金属バットを握りしめて。

心なしか……少し赤黒く変色しているようにも見えた。

「姫路さん、その金属バットは、廊下でなんとなく素振りがしたかったから持つてる……わけじゃないよ、ね」

「うふふ……内緒です♪」

笑顔なのに、目が笑っていない。

どうしよう……地面に倒れている今、僕に勝ち目なんかない。

このままだと、三途の川までの旅・三往復目・を迎え入れてしまう。
もう生死をさ迷うのだけはごめんだ!

「美波、姫路さん……一応聞くけど、許してくれる気とかは……」

「「なんのこと(でしょうか)?」」

「……いえ、何でもないです」

どうやら僕の死刑判決は、既に決定事項らしい。

「……全員、私達がいいというまで待ちなさい」

「「「「「はっ！！！！」」」」」

「美波と姫路さんの下に、男子達が全員ついている!?」

ま、マズイ……状況は更に悪化している。

二人ならまだしも、殺気だっているクラスメイト全員が相手になる
と言ったら、最早僕に勝ち目はない。

「……万策尽きたな、明久」

「雄二まで敵に……」

「なんか楽しそうだったからな。それに、明久にお灸を据えるいい
チャンスだしな」

根っからのサディストだ!!

コイツ、やっぱり僕の天敵だ!!

「……裏切り者には、死を」

「……くっ。ここまでか」

「それでアキ、言い残すことはない？」

「……せめて優しくしてください」

僕のささやかなる願いは、叶えられることはなかった。

*

「イタタタ……朝からなんてついてないんだろう」

僕は、痛む体に何とか活を入れて、授業を受けた。

今は昼休み。

いつも通りなら昼ごはんを食べる時間なのだが、

「弁当も何も持ってきてないんだよなあ……」

もとより昼食を作る金など何処にもあるわけではない。

だから弁当も持ってきていなければ、夕食すらひよっとしたら食べられないような状態になっているかもしれない。

……というのは、僕の前までの生活。

今日は弁当を持ってきたていないのは事実だが、ここ最近、姉さんが帰って来た時があったのだが、その一件以来はきちんと食事を取るようにしているのだ。

そんな姉さんもこの間、忘れ物があるからと言って日本を一旦去ったのだが……後数日経てばその姉さんも再び帰って来る。

だから、こんなにぐうたらしている生活も、後数日で終わってしまうということだ。

あんなはずではなかったのに……。

……ああ、そんなことを言ってるけど、やっぱり弁当を持って来なかったのは痛いなあ。

「お腹空いた……」

そういえば、前にもこんな一件があったっけ。

あの時は確か……美波が弁当を持ってきたてくれた時だったっけ。

いろいろあって、食べれたのは昼時からかなり時間がそれた時だったけど。

「……こんな生活してることを姉さんにバレたら、一発退場だろうな。それに、沙耶が心配するかもしれないし」

姉さんとはかく、沙耶にはあまり心配かけたくはないけど、こればかりは仕方ないよね、うん。

だってゲーム達には魔力があるんだもの。

とりあえず荷物をまとめている間だけの平穏な日々。

だが、それも後数日で……。

「……そういえば、よく考えてみればヤバいことになりそうな予感がするんだけど」

確かに、この状況は正直言つてヤバい。

転入生である亜美が、久々に出会ったと思ったら、結婚の約束を結んでいたという衝撃的現実。

もし亜美が抱き着いてきたなんてことが姉さんにバレたら……不純異性交遊として姉さんからの罰を受ける羽目に……！！

それに、沙耶はしっかり者だけど、時々何かを逸脱する時もあるから……もしか……。

「……それだけはなんとしても避けないと。その為にも、何とかして亜美を説得する必要があるかな……」

亜美は今どこにいるのだろうか。

多分教室にいると思うけど、何となくAクラスには入りづらい。

……霧島さんとかに会えたならなんとかなるかもしれないけど、僕一人になると入ることすら出来そうにない。

門前払いに決まっている。

「……とりあえずAクラスの前まで行ってみるか」

そう決めた僕は、とりあえず歩き出す。
それと同時に、

「バカなお兄ちゃん〜!!」

ドン!

激しい衝突音と共に、僕の背骨は悲鳴をあげた。

は、葉月ちゃんか……って、

「葉月ちゃん……なんで学校に？」

若干苦しみながら、僕は葉月ちゃんにそう尋ねた。
すると葉月ちゃんは、

「お姉ちゃんにお弁当を届けに来たです」

「美波に? ……また弁当忘れて行っただの?」

「そうみたいなんです……よかったら、お姉ちゃんに渡しておいて
くれませんか?」

ちよつと今はキツい所だ。

先ほども僕は、美波からの愛の(?)制裁を受けてきた所だし。

……美波だけではなく、Fクラスのほぼ全員からの集団リンチに遭
つてきたばかりなので、ちよつと教室の中に入りづらかった。

「……ごめん。ちよつと事情があつて僕は中に入れないんだ。だか
ら、葉月ちゃん一人で弁当を届けておいてくれないかな?」

「分かったです!教室までの道は覚えてますから、なんとかかなると
思います!」

「それじゃあ……またね、葉月ちゃん」

「はい!」

最後に僕は、葉月ちゃんの頭を撫でてあげる。

すると葉月ちゃんは、気持ち良さそうにしながらその行為を受け、しばらくすると、学校の中へ走り去って行った。

「…………ふう」

何故か、溜め息が洩れる。

……さて、これから僕は亜美を探さないといけないわけなのだけど。

「亜美は…………どうして昔の約束を覚えていたのだろうか？」

例え覚えていたとしても、あんな約束は破棄にしてしまえばよかっただろうに。

僕以外にも亜美にぴったりの人はいるはず……。

「あれ？明久君だ！こんな所で何してるの？」

その時。

背後より亜美の声が聞こえてきた。

本当に亜美なのかを確かめる為に、僕は後ろを振り向く。するとそこには、笑顔の亜美が、手を振っている姿があった。

「亜美…………ちようどよかった。君に話があるんだ」

「話？　話って何？」

首を傾げる亜美。

その仕草は、何とも可愛らしい……………って、違う違う！今はそんなことを思っている場合じゃなかった！

「…………亜美、あの約束のことなんだけどさ」

「約束って、あの結婚の約束？　嬉しいなあ、明久君と結婚出来る

なんて」

「……なかったことにしてもらうことは、出来ないかな？」

「……え？」

驚くのも無理はないと思う。

勿体無いと思うけど、これが僕に出来る最大限のこと。

本当に亜美のことを想っているなら……今はこの約束はなかったことにしてもらう方がいい。

その方が、亜美にとっても幸せだと思うから。

「な……何で？」

「僕なんかに好意を抱くなんて、間違ってるよ」

「違うよ！ 私は明久君だからこそ好意を持ったんだよ！」

あくまでもそう言い張る亜美。

……いや、そんなはずはないんだ。

亜美に似合いそうな条件の内、何一つ合うものがないのに。

どうして亜美は僕に好意を持っているのだろう？

「もしそうであつたとしても、この約束だけは、なかったことにして欲しいんだ」

「そんな……私、ずっと待ってたのに。明久君に会える日を、心から待ってたのに……」

酷く悲しい表情を見せる亜美。

どうして泣くのだろう？

どうして僕に会える日を、心から待っていてくれたのだろう？
分からないことが多すぎて、頭が混乱してしまう。
考えれば考えるだけ、分からなくなっていく。

「……亜美がどれだけ僕のことを待っていてくれたのかは、僕には分からない。けど、それだけ誰かのことを待っていていられるのなら、僕以外の誰かが来るのを、きつと待っていていられるから」

「……明久君は、私のことが嫌いなのか？」

「え？」

そんなわけない。

むしろ可愛い子だなと思っている。

……けど、だからこそ、僕はこの好意を受けとるわけにはいかない。

「……嫌いじゃない。むしろ可愛い子だなって思ってるくらいだよ」

「だったら……！」

「けど、だからこそなんだ。何も僕とはこれで縁を切るって言ってるわけじゃない。ただ……僕の気持ちに、整理出来ていないだけなんだ」

「気持ちの整理？」

「……うん。僕は今、正直言ってかなり戸惑ってる。亜美がこの学校に転入して、こうして約束を果たそうとしている……けど、僕の方は言えば、その約束すら忘れていたような、バカな男だ。亜美のことも、亜美と交わした約束のことも忘れていた、バカなんだ」

「……」

自分でも、よくそんなことが言えるなと思った。

自分勝手な意見だとも、言いながら思った。

けど、これは亜美と僕の二人の為でもあるのだ。

亜美が……真剣に僕のことをどこまで想ってくれているのかは分からないけど、だからこそ僕は、こんな中途半端な気持ちで、亜美と接するわけにはいかないんだ。

「小さい時にあんな約束を、しかも後先考えずに交わした僕がいけ

なかったんだ。そのせいで、亜美の心をこんなにも傷つけることに……」

「……本当に、明久君は優しすぎるよ」
「え？」

僕が……優しい？

そんなに僕はお人好しなんかじゃないと思うんだけど……。

「私の為を思つて……そんなことを言い出してくるんだもん。断れるわけ、ないじゃない」

「……え？」

「……いいよ。出会ったら結婚するって小さい時の約束は、なかったことにしてあげる」

言いながら、亜美は僕の方へと近付いてくる。
そして……。

「……んん!？」

唇に感じる、柔らかな感触。

そして、かなり至近距離にある、亜美の顔。
これってもしかして……キス？

「……私のファーストキスだよ。約束をなかったことにする変わりに……私のことを好きになってくれるまで、諦めずにアピールするから。いつか、明久君に私の気持ち完全に伝わるまで……私は諦めないから!」

そう言うと、亜美は顔を赤くして、そのまま走り去ってしまった。

……僕は、声も出せず、体を動かすことも出来ず、しばらくその場

に立ち尽くしていた。

第四問 1（前書き）

第四問 【英語】

以下の問いに答えなさい。

「I can imagine his astonishmen
t when she asked him to marry
her.」という英文を日本語訳しなさい」

姫路瑞希の答え

「彼女が彼に結婚して欲しいと言った時の彼の驚きを想像することが出来ます」

教師のコメント

よく出来ました。この英文は時制を気にする必要があるのですが、よく分かりましたね。

土屋康太の答え

「彼女は彼に驚きの想像をすることが出来ます」

教師のコメント

驚きの想像というのはどんなことですか。

吉井明久の答え

「なんのことが分かりませんでした」

教師のコメント

君は時に私達に驚きの表情をさせてくれますね。見ていて飽きないですよ。

第四問 1

次の日。

僕は、普通に目を覚ました。

けれど、心は晴れないままだった。

原因は、昨日の亜美との一件。

「……亜美に、キスされた？」

そう。

僕は昨日、亜美にキスされた。

……多分今日の僕は、亜美の顔を見ただけで顔を赤くしてしまうだろう。

そんなことを考えながら、僕は学校へと足を進めていたのだった。

「……ああ、うつ」

駄目だ。

昨日のことを思い出せといわれたら、亜美とのキスのことしか思い出せないだろう。

……あんなに顔を赤くして、僕に好意を寄せてくれている（らしい）亜美からの、キス。

それが、どれだけ深い意味がこめられているものなのか、僕は分からないでいた。

考えても、分からなかった。

「……こんな状態でFクラスに行ったら、どんな反応とっちゃうか分からないよ」

多分、冷やかされるか殺されるかの二択しかないだろう。

しかも、後者である確率が格段に高い。

高い、と言うよりも確実に後者だろう。

何せFクラスだもの。

「特に美波とか姫路さんとかに……考えただけで少し体が震えてきたな」

思わず身震いしてしまう僕。

……今日は発言には気をつけることにしよう。

そう決意したその時だった。

「おや？ 体が震えてるみたいだけど……風邪かい？」

この声は……久保君？

……多分だけど。

「えっと……久保君、だよな？」

「如何にも。僕は久保利光だ」

メガネをかけた男子生徒が一人、僕に話しかけてくる。

この人は、2 - A に所属している学年次席の久保利光君だ。

姫路さんがもし普通に試験を受けることが出来ていたとしたら、その座に座することも出来なかったかもしれないけど。

「それよりも、風邪でもひいたのかい？ 体を震わせていたみたいだけど」

「ああ……それはこれから起こる恐怖に対する僕の体の正常なる反応だから、気にしなくていいよ」

「恐怖に対する反応？ ……おかしい発言をしてしまうほど君の体

は熱でおかしくなってしまったのかい？」

まるきり僕の言葉をスルーされた気持ちだ。
心配してくれるのはありがたいんだけど……なんと言つか、別の意味の寒気がしてならない。

「いや、まさにその通りのことなんだけど……後、僕に熱は高くないから、おでこを合わせてこようとするのはやめてくれないかな？」
いくら男同士だからと言っても、こんな往来でそんな行動をやられてしまえば、周りにあらぬ誤解を招くかもしれない。
ただでさえ、そっち方面での僕の評判は……。

「おっと、すまなかった。では、そろそろ僕は授業の予習をしなくてはならないから、先に学校へ行くことにしよう」
「あ、うん。また……学校でね？」
「……！」

笑顔で僕がそう言うと、何故か顔を赤くする久保君。
……一体どうしたというのだろうか？
実は久保君こそ風邪をひいているとか……。

「……どうしたの久保君。顔が赤いよ？」
「な、何でもない！ 別に平気だから！ ……それじゃあ僕は先を急ぐから！」

逃げるようにその場から立ち去って行った久保君。
……あからさまにおかしなその行動に、僕は少しの寒気を覚えずにはいられなかった。
何故かは分からないけど。

「……それじゃあ僕も学校へ行くとしようかな」

改めて、僕は道を歩く。

……さっきまでの体の震えは、いつの間にか止まっていた。

「これは、僕の気持ち整理出来たことを意味するのかな……まあいいや」

そんなことを考えている内に、いつの間にか僕は学校についていた。玄関へ行き、僕は自分の上履きを取るために下駄箱を開く。すると、

「……ん？」

中から一通の手紙が出てきた。

綺麗な封筒に入った、一枚の便箋が。

「はっ！？これってまさか……ラブレター！？」

叫んで、思わず僕は周りを確認する。

……よし、周りに敵なし。

どれどれ、じっくり中身を見てみることにしよう。

ちなみに、「ラブレター」じゃなくて「ラヴレター」なのが重要だったりする。

封筒の封を開き、中身を取り出す。

白い紙に書かれた黒い字を見て、僕は……。

「……え、何これ？」

そんな反応を取った後で、

[illegible]

大いに驚いてしまった。

原因は、この手紙に書かれていた文字。

文面は、こうだ。

「吉井明久！ 私はお前が憎い！！ 昼休みに屋上に来たれたし！！！！ 一人で来なさい！！！！ 絶対来なさい！！！！ 来なかつたら……泣いてやるんだから！！！！！！！！」

「これ……明らかに果たし状だね？　ていうか、泣いてやるって

⋮
L

けど、どうして僕に果たし状なんかが届いたのだらう？

……分らないけど、とりあえず僕は、この手紙を鞆の中に仕舞い、教室へと向かったのだった。

「ていうか……私？」

そのことに気付いたのは、大分後の話だった。

*

時が過ぎること、昼休み。

僕はみんなに適当なことを言っ
て、何とか昼休みを空けておいた。
現在、屋上にいるのは僕一人。

他に人が来る様子は……今のところはなさそうだ。

「それにしても、一体誰が……？」

こんな果たし状を送って来たのだろう。

そんなことを呟こうとした、その時であった。

突然屋上に続く扉が勢いよく開かれる。

そこからやってきたのは……。

「……君が、そうなの？　って、凄い息荒いけど、大丈夫？」

「ゼエハアゼエハア……だ、大丈夫よ……アンタに心配される筋合
いなんて、な、ないわ……」

髪は薄紫色でツインテール。

瞳はパッチリとしていて、色は黒。

物凄く息が荒いから、多分ここまで急いできたのだろう。

それにしても、何でこの子が僕にあの手紙を？

「で、君が……僕にあの手紙を？」

「ええそうよ！　私の亜美様に彼処まで破廉恥な行動をするなんて

……なんてケダモノなの！」

「……私の、亜美様？」

少し意味が分からない。

この子は一体、何者なのだろう。

「えっと……君の名前は？」

「私は……綾瀬由菜！　亜美様を何処までも愛してる乙女よ！！」

……うん、大体分かった。

この子は多分、清水さんと同種族の人間だ。

そっち方面の人間なんだ、うん。

「それで、君はどうやって僕に戦いを挑むの？ 一応、素手でつてわけじゃなさそうだし……」

「もちろん、召喚獣を使って戦うわ！」

そんなことだろうとは思っていたが、先生の許可がない限り、召喚獣を出すことは出来ない。

まあ、一つだけ例外がないこともないんだけど……。

「なら、俺がこの場で立会人となってやろうか？」

「え……」

この声、聞き覚えがある。

いつも僕と同じクラスにいる、さっきまで一緒に話していた僕の悪友……。

「って、雄二！ なんで屋上に来てるのさ？」

「……まあ、色々事情があつてな。今、脅威から逃れてきたところだったんだよ」

「脅威……？」

何だろう、雄二の言う脅威って言うのは……。

ちよつと気になるけど、深く突っ込んではいけないんだろうなあ。

「とにかく、立会人になるっていうのはどういうことよ？」

「ああ。それについては説明しなければならなかったな」

そう呟くと、雄二は自分の腕を見せる。

右腕には、黒い腕輪のようなものがついていた。

あれは確か白銀の腕輪だ。

「何よそれ？」

「白金の腕輪だ。コイツがあれば、先生じゃなくとも、召喚許可を降ろすことが可能ってことだ」

「雄二、君は僕のことを嫌いなのかい？」

「お前だけ幸せな気分を味わうのが憎いだけだ。これは昨日の延長戦とでも思ってもらえればいい」

雄二が来たことで、召喚獣の戦いは避けられなくなった。

……今からでも霧島さんを……。

「呼ばせないぜ。翔子を呼んだら……島田と姫路、そして全クラスメイトでお前に地獄を見せてやる」

「お前は僕の友達じゃなかったのかよ！」

「友達だからこそだ。いいからお前はソイツと決闘しろ」

満面の笑みを浮かべながら、雄二がそう宣言する。

くっ、他人事だと思って……！！

どうやら僕は、綾瀬さんと決闘するのが絶対条件となってしまったらしい。

すると綾瀬さんは、僕のことを不敵な笑みを浮かべながら見て、

「そう……貴方、そのバカと一緒に清涼祭で行われた試験召喚大会で勝ったペアの片割れ……坂本雄二だったのね」

「ああ。名前が広まってるみたいで光栄だな」

「元々Fクラスの代表ってことで有名だけだね……まっ、バカの中でもマシってただけだね」

「本当、その通りだよね」

「底辺のお前が言うか」

失礼な！

僕だって本気を出せば……多分それなりにマシになると思う。
今はまだ本気出してないだけなんだ、多分。

「ハア……とりあえず、さっさと始めるぞ」

「ええ、分かってるわ！」

「やるしかないの……どうにか逃げる方法は！？」

「ねえよ。だからとつとと覚悟を決める」

ここまで来たら、雄二に従うしかない。

別に何十人もの人を相手にするわけじゃない。

これは一騎討ちなのだ……ひょっとしたら僕にも勝ち目があるかもしれない。

「それじゃあ行くぞ……起動……！」
アウェイクン

雄二が右腕を空に突き上げて、そう叫ぶ。

すると、雄二を中心として召喚フィールドが広がっていく。

これで準備はほぼ完了。

後は僕達が召喚獣を出すのみだ。

「それじゃあ……」

「行くぞ！」

「「サモン試獣召喚……」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8876z/>

バカとアイドルと後輩達との日常風景

2012年1月7日08時47分発行